

つ、賤女の喜ひ如何計りぞ、物に例へん様もなく、直ちに我同盟國なる佛國大使を訪ふて、日本に夫の安否を尋ね給へと請ひ侍れと。大使は返信を得るの望なしとし、斯る問答は無用なり、思ひ止まり、努々心を勞する勿れと諭されて、賤女が請をぞ斥けらる。然れど大和の武士は仁義の心深く恩愛の情を汲み、強きを拆き弱きを助くる眞情は、其公戦に勇なるに引替へて、捕虜の優遇と傷者に對する注意にて遍て知られ侍りけり。哀れ賤女が煩悶心勞を察せられ、所天の安否を知らしめ給へかしと、佛文以て水莖の跡清く、物の見事に書綴り、心中限

りなきの情をぞ訴へける理りせめて憐れなり。我大臣は之を聞き、惻隱の情禁じ難く、夫人展轉の思を慰めんが爲め、遍く有司に命じて情報を求めしむ。内兩軍を極め、外友邦、然れど海事渺茫情定め難し。忽ち聞く虜中四名あり曰く裕曰く納曰く披倫四名共に大尉の部下にありて其負傷戦死の状を目撃す。是に至りて事實判明蔽ふ可らず、轉々有司に教へて懇懇に報せしめ、終に臨んで眞情更に語を寄す

我及ぶ限りの手段を取り得る所の情報斯の如し、然れども海上の激戦は事情錯綜意外の出來事ごとあるなきを保せず、良人或は貴國艦隊の救助す

る所となり、尙ほ此世に在すやも計り難し、貴國軍務當局にも御聞合せあらまほし。其れはさて措き良人の率ひ給ひし「ステレグスチー」の艦員が我優勢なる艇隊に双向はれ、最後に至るまで奮戦力闘天晴れ大國艦隊の名譽を發揮せられしは、豫ての御薰陶左もこそと思ひやられて慕はしく、最終の望は如何あらんか知らねども、今貴女の斯の如き良偶を失はれしに對しては、茲に最も深厚なる哀悼の情を表せざるを得ざるなり

と、聞くならく是れ東方敵國の信、九華帳中紅淚新なり。噫々戰國の例とは云ひながら偕老の契り半に破れ、春風桃李花開くの朝、秋雨梧桐葉落るの夕、獨り夫人をして空閨を守らしむ、閑花離亂終に情なく、騷去り空く留む虞氏の涙、賤の緒環繰り返し昔を今に爲す由もなく

桃花春水生前夜 楊柳秋風憶故年

西幸吉氏の依頼に應じ作るものなり、記事は明治三十七年七月十一日の時事新報にあり、兎筆並墨敢て當らす請ふ諒せよ

琵琶新曲 溫折錄畢

著 作 權 所 有

明治三十九年十一月十日  
明治三十九年十一月廿日  
發行



印刷  
發行

\*\*\*  
\*\*\* 定價三拾五錢 \*\*\*  
\*\*\*

著 者 田 尻 稻 次 郎

發 行 者 平 本 正 次

印 刷 者 天 野 耕 一

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
十二番地

印 刷 所 秀 英 舍 第 一 工 場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
十二番地

發 行 所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
電話本局二千九百九十九番

光 融 館



97  
3201

光融館出版書籍大賣所

東京 神田  
三田 橋 郷 本

東京 上 岡 有 武 中 渡 田 盛 文 森 岡 大 東 北 良 服 春 福 佛

京 田 崎 省 斐 康 邊 中 春 江 崎 倉 明 分 務 務 明 降 部 部 教 島

堂 堂

堂 堂

布 草 谷 達 川 屋 阜 草 條 條 路 小 三 油 都 古 石 多 島 町 阪 條 條

森 淺 玉 盛 杏 澤 川 永 其 文 其 能 出 典 類 爲 法 吉 加 借 洗 植

江 水 支 文 聲 東

店 店

人 岡 熊 同

分 出 本 井 澤 岡 山 岡 原 條 湯 野 本 前 瀧 岡 空 淵

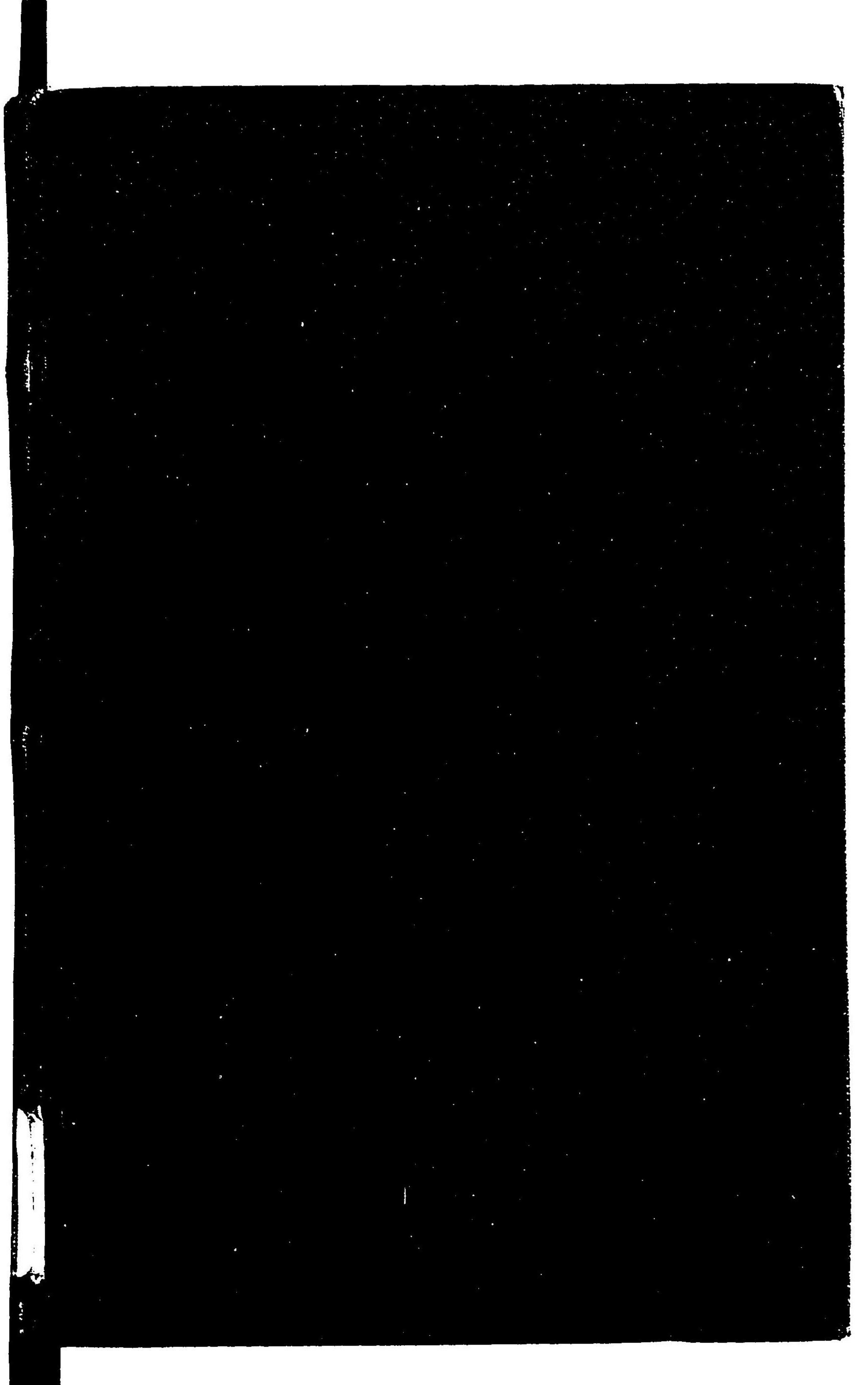
甲 武 長 品 日 中 宇

雙 崎 內 井

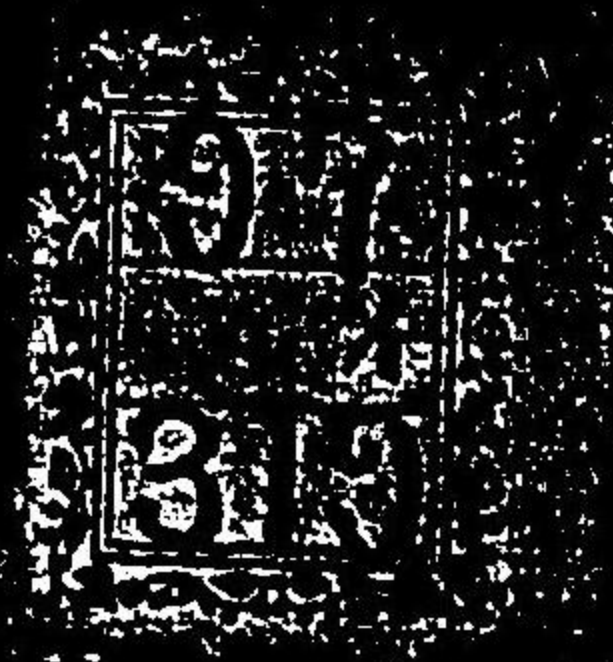
店 店











074547-000-5

97-319

温折録

田尻 稻次郎/著

M39

CEJ-0003



97  
4  
319

